

見えないペンギンペンジャミン

つめながゆづじ

ある国が南太平洋で何度も核の実験を行いました。

核というのはとても大きな爆弾のことで、今から50年以上も前に日本でも広島と長崎にその爆弾が落とされ、たくさんの人が死んでしまいました。

今の核爆弾は当時の何倍、何十倍もの威力を持っており、その爆弾から出る放射能というものでたくさんの生き物が死んでしまいました。

核爆弾の実験が行われた南太平洋のずっと南に氷でできた南極という大きな大陸があります。そこには、いろんな種類の動物が住んでいて、その中にはたく

さんのペンギンもいました。

そのペンギンの中にペンジャミンという一匹の雄のペンギンがいました。ペンジャミンは家族や仲間と南極で平和に暮らしていましたが、核実験の爆弾のためにお父さんもお母さんも妹も、そして一緒にいた仲間もみんな死んでしまいました。

運良くペンジャミンだけが助かったのですが、ペンジャミンの目は爆発したときの放射能のために見えなくなっていました。

ひとりぼっちになったペンジャミンは

淋しくてたまりません。目が見えないので、とても歩くのが怖くて、時に氷の裂け目や海に落ちたり、何度も死にそうな目に遭いました。

そして何よりお腹がすいても、海に潜って大好きな魚を捕ることもできませんでした。どうにかこうにか別ペンギンの集団を見つけだし、仲間に入れてもらいましたが、よそ者で目が見えないペンジャミンはこう言ってみんなにいいめられました。

「やーい、やーい。目が見えないペンジャミン。お真真っ暗ペンジャミン。すぐに転ぶぞペンジャミン。見えないペンギンペンジャミン！」

だけど、ペンジャミンは生きて行かねばなりません。自然は厳しく、一人でいるよりも仲間と一緒にいるほうがどれだけ安心かわかりません。

目が見えないながらも魚を捕ることを

覚え、なんとか生き抜いていたペンジャミンでしたが、ある日南極に強い風が吹き、仲間のペンギンたちが大勢で移動し始めました。

一所懸命ついでにこうとしたペンジャミンでしたが、仲間の鳴き声は吹雪の音にかき消されてしまい、目が見えないペンジャミンはいつの間にか一人取り残されてしまいました。ペンジャミンはまたひとりぼっちになってしまったのです。

ひとりぼっちになったペンジャミンは仲間を捜し求め、氷の上をさまよひ歩いてきたとき何かにぶつかって転んでしまいました。そのとき、そのぶつかった何かから「キューン」という音が聞こえました。

目が見えないペンジャミンは、何だろうと思うとそーっと触ってみると、なま暖かく、ふさふさとした毛の感じしました。するとまた、「キューン」と音が聞こえます。血の臭いをかき、とっさに

生き物だと感じたペンジャミンは、「どこうしたの？ケガをしているの？君はいつたい誰なんだい？」と尋ねました。するとその生き物は「わたしはアシカのアンナと言います。人間の鉄砲で撃たれて、足をけがしています。」と答えました。驚いたペンジャミンは傷口を探し当てると、舌でペロペロとなめ、傷口をいやしてあげました。「でも、人間で何だろう。鉄砲っていったい何なのだろう」とはじめて聞く言葉について考えていました。

それから、ペンジャミンは目が見えないながらもアシカのあんなに魚を捕ってきてあげたり、傷口を嘗めてあげたりして一所懸命看病しました。そんなペンジャミン必死の看病のおかげでアンナは日増しに傷が快復し、一人で動けるようになってきました。

ある日ペンジャミンはアンナに聞きま

した。

「ケガをした原因は人間とか鉄砲とか言ってたけど、それって何？」

アンナは急に泣き始めましたが、その後ゆっくりと話し始めました。

「私たちアシカは海の魚を食べて家族や仲間と一緒に楽しく暮らしていました。

ところがある日、バーンという音が聞こえたかと思うと、仲間が血を流して倒れていたのです。お父さんはお母さんの手を引き、私を抱えて一所懸命逃げようとしていましたが、お父さんもお母さんもパーンという音がしたかと思うと動かなくなっていました。私は怖くて怖くて夢中で逃げ回りましたが、足を撃たれてしまい気を失っているところでペンジャミンさんに助けられたのです。人間というものは、鉄砲という火の玉が飛び出る道具を使って私たちアシカを捕まえ、皮を剥いてしまうのだそうです。結局私一人が助かったのだけれど、お父さんもお母さんもお母さんもお母さん人間に殺されてしまい

ました。」

ペンジャミンは事情は違ってもひとりぼっちになったアンナの気持ち痛いほどよくわかるので、とても哀想だと思えました。

足の傷が治ったアンナは心の傷も少しずつ快復し、ペンジャミンに「今度は私がペンジャミンさんに魚を捕ってきてあげる。」と言って、海に飛び込み食べられないほど一杯魚を捕ってきました。

ペンギンとアシカという、違う動物同士でしたが、お互いに優しい心の持ち主で、また独りぼっちどうしということもあり、二人は仲良く暮らしていました。

ところが、ある日のことです。

ペンジャミンとアンナが仲良く遊んでいると、どこからともなく「バーン」と言う音が聞こえました。アンナは「人間よ！人間が来たのよ！」と恐れ驚きながら、ペンジャミンの手を引いて逃げよう

としています。

「おつ、あそこだ。あそこにアシカがいるぞ！」と人間の声が聞こえてきます。アンナを見つけた人間たちは、鉄砲を携えて今にも襲ってこようとしています。

ペンジャミンは「こつちだ！」と言って、アンナの手を引く張っていききました。後ろから人間たちの鉄砲が襲ってきます。「バーン、バーン」

ペンジャミンの耳元を鉄砲の弾がかすり抜けます。ペンジャミンとアンナは右へ行ったり左へ行ったりしてはいますが、どこをどう逃げていけばよいのかわかりません。今にも人間が近くまで追ってこようとしたとき、ペンジャミンは手探りでひとつの洞穴を見つけました。「ここだ！」と思ったペンジャミンはアンナをつれて、その穴へ入っていききました。人間たちは「おーい、追いつめたぞ。この洞穴の中にさっきのアシカがペンギンと一緒にには行っていったぞ。これでもう袋の鼠だ。」とささやき合っていました。

洞穴の中は真つ暗で、大きなつららが一杯ぶら下がっています。

人間たちはあまりの暗さにどう歩いていかわからず、そろそろと入っていきこうとしていきます。

ところが見えないペンギンペンジャミンにとっては洞穴であるうとどこであるうと同じです。目が見えない分、発達した耳や直感で穴の中を縦横無尽に進んでいきます。

ペンジャミンはアンナに語りかけました。「アンナ、ここにじつとして。僕が人間どもを懲らしめてやるから。」

「大丈夫？ペンジャミンさん。」心配そうにアンナはペンジャミンを見上げます。「大丈夫、大丈夫。僕にとっては外も洞穴もおんなじさ。だって、どつちにする何も見えないんだもの。」

そついうと、ペンジャミンは洞穴の中をぐるぐると周りながら、天井にぶら下がっている氷をたいたたり、落ちている石を拾って壁にぶついたり、変な声を出

して人間たちを驚かせました。氷でできた洞穴はちよつとした音でも大きく響きまた真つ暗で何も見えないので、人間にとつてはどこから声が聞こえてくるのかわかりません。

人間たちは声のする方へ向かって鉄砲を撃つたところ、その鉄砲の音が振動となり、天井にぶら下がっていたつららがどつと落ちて来ました。真つ暗闇の中、洞穴中に音が響き渡ったり、冷たい氷の固まりが体中に落ちてきたりしたので、人間たちはとても怖くなつてしまい、這々の体で逃げ去ってしまいました。

しばらくすると、ペンジャミンはアンナに向かって

「もう大丈夫。人間たちはいなくなつたよ。」と言いなから、アンナの手を引いてほらあなから出てきました。

けれど、どうしたことでしょう。その洞穴から出てきた瞬間ペンジャミンはパツタリと倒れてしまったのです。

驚いたアンナは「ペンジャミンさん、

どうしたの？ペンジャミンさん、ペンジャミンさん！」とペンジャミンの身体を揺すりながら声を張り上げました。

ふと見ると、ペンジャミンの身体から真つ赤な血がどろどろと流れています。

洞穴の中で人間たちを困らせようと動き回っているとき、人間の撃つた鉄砲の弾がペンジャミンに当たっていたのです。

ペンジャミンは息をハアハアさせながら、アンナに語りかけました。

「ア、ン、ナ。君と出会えて、僕は、とつても．．．とつても嬉しかつた。

君の優しさ．．．君の笑い声．．．君と、いるだけで、とても幸せだつた。

僕は、決して、決して、アンナの、ことを、忘れ、は、しない、よ。

ただ．．．ただ、できたら、一度だけでも、君の顔を、僕のこの目で、見てみたかつた．．．」「ペンジャミンさん！ペンジャミンさん！しつかりして！お願い！また私を独りぼっちにさせない

で！」

アンナは泣きじやくりました。止めどもなくアンナの目から涙が溢れ、ペンジャミンの声はだんだん小さくなり、息が遠くなってきました。

その時です。アンナの流した涙の一粒がペンジャミンの目にぼとりと落ちました。するとどつしたことでしょう。ペンジャミンの目がゆっくりと開き始めたのです。

ペンジャミンは薄ぼんやりと見えるアンナの顔を見て、

「ああ、アンナの顔が見える。見える、見える、アンナの顔が。

僕が思っていたとおり、とても可愛く、素敵な．．．」

そついうと、ペンジャミンは安らかに眠つたように死んでしまいました。

けれど、そのペンジャミンの死に顔は微笑みを浮かべ、とても幸せそうな顔でした。

おわり

